

にまで下がり、これまた死者が続出する。その時の 500 mb 天気図を調べると、カナダ上空の極渦が中西部上空まで南下している。気象学的北極が中西部に存在すると解釈できる。そうかと思えば、1月に20°Cを超えることもあり、気温に敏感な学生達はたちまち半袖姿で外を歩き回る。アメリカに平均はないということが、こういうところにも言えるようである。そう言えば、彼等は真冬でも厚いダウンジャケットの下に半袖のTシャツ1枚ということが多いようだ。キャンパス内の建物の中はたいていセントラルヒーティングで汗ばむ程に暖かいからである。雪が積もると彼等は外に出て、snow angel(両手を広げて雪の中に倒れ、手をパタパタと上下に動かして跡をつける)や snowman(雪だるま)を造ったりする

が、彼等の雪だるまは雪玉を3つ重ねて造る。東洋人と比べ、大きい胸、くびれた腰、そして大きいお尻を持つ彼等には、雪だるまの胴体として雪玉2個が必要と解釈すべきだろうか。

2月2日は、グランドホッグデーである。この日が好天で、冬眠から覚めて土の中からはい出してきたグランドホッグといういたちに似た小動物が、地上の自分の影に驚いて穴の中に戻ってしまうと春の訪れはまだ遠く、逆に、その日が曇っていたら春は近いと伝えられている。天候変化の激しい中西部であるが、比較的穏やかに一年が過ぎてくれることもある。果たして今年はどうな一年となるのであろうか。

(1987年1月20日)



D. Tolmazin 著
ELEMENTS OF
DYNAMIC
OCEANOGRAPHY

181頁 1985年 Allen & Unwin Inc.
4,540円

著者はコネチカット大学海洋科学部準教授で、文字どおり海洋力学の基礎を書いた本であるが、内容は海流の物理である。本文はわずか169頁で内容は次のとおり。

1. 海洋大気相互作用 2. 海流研究の方法 3. 海流の原因 4. 大洋または海における水のじょう乱と回転 5. 表面流の西岸強化 6. 反対流と小さなうず 7. 深海流 8. 海流と気候。本書に書かれていること自体は英文書を読まずとも、例えば永田豊「海流の物理」(講談社ブルーバックス)を読めばことが足りそうである。教科書として書けばこうなるということだろう。一応 undergraduate students 用としていながら、偏微分やベクトル記号が出てくる。この辺が本書の書評(アメリカ気象学会誌1985年11月号)を書いたアナポリス海軍大学校海洋学部ウィリアムス教授のお気に召さぬところであったらしい。アメリカのテキストは気象学書でもそうだが、読者対称をはっきりさせて、それなりの数学を使うことが守られているようである。一般に、日本ではむづかしい専門書か通俗解説書であって、大学の undergrad-

uate 用のテキストというのとはなかなか見当たらない。(最近、放送大学用テキストにはなかなか立派なものがある。)

さて、最後の章「海流と気候」の中に、「世界の大洋と氷河時代」の節があり、1万8千年前の北半球8月における表面海水温度と氷のひろがり、氷の高さと陸地のアルベドの世界地図が一頁大に掲げられてあり、また現在との偏差図もある。さらに、本書はロシアの文献を多く引用しているが、「地域の気候改造」の節では Budtolaev project というのがある。これは、津軽海峡と宗谷海峡にダムをつくり、間宮海峡を改造して暖流を北上させ、日本海とオホーツク海北西部をあたため、ロシアの沿岸を暖くしようというものである。同地域の海流と水温分布について現況図とプロジェクト完成後の分布図が載せられているのには驚く。3頁にわたってのべられているが、最後はゲーテの言葉で結んである。いわく「自然は常に正しく、常に公明正大である。過失と間違いは人間のあり方からおこる。」

前述の書評者は二、三の記述の誤りを指摘していたが、私は誤値か計算ミスか、数字に納得のいかない点があった。とにかく、横幅のひろい読みやすい組み方で、図版も非常に多く、親しみやすい綺麗な本である。気象力学入門書を読む程度の人向きで、著者の序文にもあるとおり気象学者のための海洋学書ともいえる。

(島田守家)